

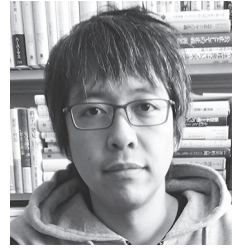
争論 現代社会、そして生協にとっての民主主義とは？

民主主義の発展と現代社会の課題

山本 圭

立命館大学法学部准教授

聞き手：加賀美太記（就実大学講師）



【加賀美】 近年、世界各地で政治的な大変動が相次いでいます。こうした事態を分析するのが、山本先生のご専門である政治学だと思います。まずは、政治学において民主主義が、どのように研究されてきたのかをお伺いできますか。

【山本】 私の専攻は政治学で、おもに民主主義論などを研究しています。政治学にもいろいろな分野やアプローチがあり、私は政治思想や政治理論など、どちらかというと抽象的な分野を専攻しています。

もともと、私はハンナ・アレントの研究からスタートしたのですが、アレントは社会問題や生活面での協同を政治の問題としては捉えようとはしていませんでした。やはり民主主義の問題は人びとの生活や貧困の問題に届いていないといけないのではないか、という問題意識から、その後はアルゼンチン生まれの政治理論家であるエルネスト・ラクラウと、ベルギー出身の政治学者のシャンタル・ムフが唱えたラディカル・デモクラシーの研究をしてきました。その成果は、2016年に『不審者のデモクラシー—ラクラウの政治思想』（岩波書店）としてまとめています。

私の研究のバックボーンはそうした流れですので、本日は具体的な話というよりも、やや俯瞰的な観点から民主主義についてお話しできたらと思います。

民主主義＝選挙というイメージの原点

さて、20世紀の民主主義をめぐる理論の系譜を振り返ると、マックス・ウェーバーやカール・シュミットもありますが、まずはシュンペーターから、というのが定石だといえます。ヨーゼフ・シュンペーターは著名な経済学者ですが、1942年に『資本主義・社会主義・民主主義』という一般向けに書いた書物のなかで、1章分を民主主義の議論に割き、私が「シュンペーター・モデル」と呼ぶ、彼独特の、そして経済学者らしいあけすけなデモクラシー論を展開しています。

シュンペーターは、デモクラシーの「古典的なモデル」を批判します。哲学者ジャン＝ジャック・ルソーのいう一般意思のようなものが存在し、共同体全体の公共的な意思と一致するというモデルです。ところが、そういう共通善のような古典的な民主主義論を、シュンペーターは「そんなものは存在しない」と退けます。

では、シュンペーターにとって民主主義とは何かというと、それは投票のシステムだ、と言います。投票で、一般国民がエリートである政治家を選出する。エリート政治家たちは、有権者の票をめぐって競争する。そういう制度的な装置が民主主義である、と彼は主張します。すなわち、民主主義と

は、古典的・古代ギリシャ的な民主主義、つまり人びとが政治に自発的に参加し、意思決定に関わっていく参加的・人民主権的なものではなく、シュンペーターの視角からすると、民主主義とは「選挙によって自分たちに代わって決めてくれる人を選ぶこと」となるのです。有権者の役割は、代表者を選ぶことになるので、古典的な人民主権とは、その意味するところが変わってしまっています。

シュンペーターの説明は、決して彼の理想を語っているものではありません。経済学者らしく、「いま私たちが用いている仕組みはこうのように説明できる」という話に過ぎません。ただし、これが政治学者にも受け入れられ、アメリカの政治学の大御所であるロバート・ダールが、このシュンペーター・モデルを政治学の文脈に非常にエレガントなかたちで落とし込んでいきます。そして、共同体のなかで政治家ではなく、いろいろなセクターが、牽制し合ったり妥協したり競争したりしながら意思決定を下から上へ伝えていくアメリカ型多元主義的モデルへと洗練させていきました。

結果として、このシュンペーター・モデルは、非常に強固な民主主義のイデオロギーを形成したのではないかと思います。そして、私たちはおそらく、いまでもこのイメージから逃れられていません。たとえば、安保法案のときに反対デモなどが全国各地に広がりましたが、すぐさま「選挙で決めたんだから文句を言うな」という声が上がりました。橋下徹さんは「民主主義というのは選挙だ。文句があるんだったら選挙に出ろ」と言ったりしましたよね。こうした「民主主義って、選挙でしょ」という私たちの「常識」を形成したのがシュンペーター・モデルだったのではないかと。

参加デモクラシーと教育的効果

ところが、1960年代頃から、選挙に収まらない多様な声が、人によっては「新しい社会運動」と呼ぶような仕方でも噴出します。たとえば、専業主婦をはじめ、これまで政治的なアクターだとみなされてこなかった人たちが、環境問題や消費者運動、あるいはフェミニズムの運動、反核の運動などをやったりする。そういう流れを見て、政治学者らも「民主主義をエリート的な競争主義へと還元してしまうシュンペーターの民主主義理解は、現実には追いついていないのではないか。現にいま、エリートではない普通の人たちが自分たちの声や要求を路上で訴えているではないか」と語るようになりました。

そうした文脈から、イギリス出身の政治学者であるキャロル・ペイトマンが、1970年に著書『参加と民主主義理論』で「参加デモクラシー（参加民主主義）」を打ち出します。さらに、幾人かの政治学者がペイトマンに続くことで、70～80年代にかけて「民主主義とは、選挙や代表制においてエリートを選ぶことではない。人びとの暮らしや日常のなかに参加の契機を織り込んで、強固で安定した民主主義社会・市民社会をつくっていくことだ」という議論になっていくのです。

なお、参加デモクラシーにおける参加の幅は人によって異なっていて、ペイトマンはわりと穏当な主張をしていました。たとえば、職場や学校、家庭、地域社会などです。そうした、人びとが暮らす日常の場において、上の人々がすべて決定して、それに市民が従うようなトップダウンモデルではなく、職場や地域社会における意思決定などに市民は関わっていかなければいけない。そうした私たちの日常に、どのように

参加の契機を織り込むのか、というのが彼女の基本的な問題提起です。

彼女の主張の理由にもなりますが、大事なのは、参加デモクラシーが「教育的効果」を重視したことです。人びとは参加を通して市民として成熟し、「市民としての徳」のようなものを涵養していく。たとえば、他人の説得の仕方や他人の話への耳の傾け方、妥協点の探り方、レトリカルな話し方、時には自分の私的な利害を括弧に入れて、何がみんなにとっていいことなのかという観点から公正な判断を下すことなど、参加デモクラシーは優れた教育的効果をもたらすのだ、というのがこの理論の重要な主張です。

参加デモクラシーは現在もそれなりに影響力を持った理論ですので、振り返られることも少なくはありません。そして、いまでも読み返すに値する分野だと思います。

【加賀美】 60～70年代というと、ちょうど日本の地域生協が本格的に登場しつつあった時代と重なります。そういう意味では、地域生協の登場もこうした参加デモクラシーの議論には影響を及ぼしていたのでしょうか。

【山本】 参加デモクラシーは、意思決定過程のさまざまな場面に市民として関わっていかねばいけないという議論です。その場面は、いわゆる中間団体と呼ばれる地域の自治会や労働組合などが想定されていました。参加デモクラシーの理論的な中心となったペイトマンは、とくに職場を強調しますね。

ただ、生協、あるいは生協も関わっていたと思いますが、消費者運動のような社会運動に彼女が直接言及していたかどうかは確認しなければいけませんが、議論の射程

には入っていたと思います。参加デモクラシーは、そういった運動でも、自分たちの意見を取りまとめるなかで、意見のぶつかり合うプロセスが伴うはずであり、それこそが総合的に市民社会の活性化につながるのだ、というように論を展開しますので。

【加賀美】 かつて、生協は民主主義を学ぶ場だったという風にも言われていましたが、参加デモクラシーはそうした生協像とマッチする議論のように感じられます。

熟議民主主義と闘技民主主義

【山本】 そうした参加デモクラシーの潮流と一部オーバーラップしながら現れたのが、ユルゲン・ハーバーマスの「コミュニケーション的行為の理論」をベースとする「熟議デモクラシー（熟議民主主義）」です。熟議デモクラシーも、参加を重要視しますが、参加デモクラシーと異なるのは「熟議を通じて、コンセンサスを形成していくこと」を重視する点です。

これは、簡単に言ってしまうと、対話をより重視する立場です。熟議と呼ばれる理性的な対話を通じて、自身のイデオロギーや思い込みが変容していく、そのプロセスこそが民主主義において重要なのではないかというのが熟議デモクラシーの核となります。

熟議デモクラシー理論は現在にいたるまで、民主主義論の分野で注目されている理論です。実際、熟議デモクラシーの研究は、すごく活気があって、グローバルなレベルでの熟議や教育現場における熟議など、いろいろなところに応用されています。

それに熟議デモクラシーは、行政への政策指向がある点でも、参加デモクラシーと

は異なります。参加デモクラシーが議会にとどまらない多様な参加を強調する一方、熟議デモクラシーでは、市民社会と意思決定の場である議会をどのように連携させるのか、という非常にシステマティックな構想を描きます。たとえば、無作為抽出した小集団の話し合いの結果を、実際の政策決定にいかにしてくみあげるのかなどの、ミニ・パブリックスの意義が研究されていたりします。

このような「熟議は一部の議会や政治家だけがするものではなく、地域などのいろいろな場において実践し、決まったことをまた政策決定の議論に上げて、そこでまた熟議が行われる」という、人によっては「熟議システム」という言葉を使って説明しますが、そうした社会全体のコミュニケーションを増していく熟議デモクラシーが強い理論として成立しています。

しかし、90 年代に入ると、「熟議デモクラシーは、理性的な個人を前提としすぎているのではないか」、「政治における感情や情動の役割を軽視しているのではないか」といった批判が現れます。私が研究しているラディカル・デモクラシーもその一つです。そして、先に言及したムフなどが、熟議デモクラシーを批判するかたちで、アゴニスティック・デモクラシー（闘技民主主義）を唱えるようになりました。

熟議デモクラシーが「理性的な対話をして合意を形成するのが民主主義である」ことを重視するのに対して、闘技デモクラシーは「どれだけ話し合っても、完全なコンセンサスはできない。社会には意見のズレ、よく言えば意見に多様性があるからだ。多様性、つまり意見の違い、食い違い、かみ合わなさを受け入れるのが本来の民主主義である」と言って、互いに相いれない対立的なモメントを強調します。こうした「民

主主義とは闘うことだ」という趣旨のことを、ドイツの法学者のカール・シュミットの理論などを用いて主張したわけです。

ただ、この闘技デモクラシーにおける対立は、決して相手を排除するような類のものではありません。自由民主主義を尊重するもの同士、すなわち共通のルールを尊重する対等な者同士の対立であり、だからこそ「闘技」という、ちょっと特殊な言葉が使われるのです。

【加賀美】 議論でコンセンサスをつくる熟議民主主義に対して、闘技を通じて多様性を受け入れるという闘技民主主義の論理は理解するのが難しい考え方です。さらに詳しく教えていただけますか。

【山本】 それは、熟議デモクラシーとの対比がわかりやすいと思います。

闘技デモクラシーでは、コンセンサスを形成しようとする熟議を、違う意見が出しにくかったりするなど、結果的に一部の人に対して抑圧的になりかねないと捉えます。もちろん、闘技デモクラシーの論者がコンセンサスを取らなくていいと考えたわけではありません。現実の政治において、コンセンサスは不可欠です。しかし、熟議は最終的には統一的な結論に落ち着くという前もっての想定があるのではないか、それはやはり問題では、と彼らは考えるのです。

たとえば、会議の終盤に、それまでの議論と違うことを言いだされるのは嫌ですよね。ひとつの意見だけでも大変なのに、場合によっては他の人もいろいろ言いだして、收拾がつかなくなって会議が1時間も2時間も延びたりする。なので、「言いたいことはあるけど黙っておこう」とか「黙っててくれないかな」と思ってしまう。私た

ちのこうした経験からもわかるように、「コンセンサスは形成できる」という理論は、ときに抑圧的に働き、ある人びとを沈黙させるような仕方、とりわけ声の小さい人にとっては抑圧的に機能しかねません。そういう懸念を、闘技デモクラシーの論者は抱いたのです。

そこで、闘技デモクラシーの論者は「対立は対立のままでいい」と主張します。なぜなら、いろいろな対立があることによって民主主義は活性化するし、多様な意見があることがわかるからです。繰り返しますが、現実のレベルでは、いろいろな妥協や合意形成が必要です。ですが、あらかじめそうした着地点を想定しておくのではなく、また形成された合意もあくまで一時的な帰結であるというところに、熟議デモクラシーとの理論的なレベルの違いがあるのだろうと思います。

2000年代の民主主義論は、ながらくこの「熟議か、闘技か」「合意か、対立か」という論争がありました。ただ論争の末に、最近では「熟議においても対立は大事だろう」という、非常に常識的な折衷案みたいな感じになっています。あるいは、かつてのようなシンプルで牧歌的な対立軸すら遠ざかってしまったのが、いまのポピュリズム的な状況なのかもしれません。

ポピュリズムをめぐる民主主義論

【加賀美】 ポピュリズムという言葉が出ましたが、今の政治情勢を語る重要なキーワードだと思います。ポピュリズムは現在の民主主義論のなかで、どのように語られているのでしょうか。

【山本】 さきほど申し上げたように、民主

主義論においては、2000年代には「熟議か、闘技か」といった論争が盛んにおこなわれました。ところが、現実には2008年に金融危機が起きて、またアメリカやEUの新自由主義政策の行き詰まりがどんどんと可視化されて、にわかにポピュリズムが台頭し始めました。

熟議デモクラシーは、いまでも政治理論研究において非常に人気がありますし、日本の民主党も一時期は「議会における熟議をどのように進めるか」とか「教育界など、いろいろなセクターの代表者たちの間の熟議をどのように行うか」ということで、非常に大事な議論をしていました。

しかし、熟議デモクラシーは理論的にも現実的にも、昨今のポピュリズムの問題には十分に対応できていないのではないかと思います。それこそアメリカの大統領選でトランプを支持したラストベルトに代表されるように、熟議を拒む、あるいは「熟議は、ある種のエリート主義的な制度設計にすぎない」と、システム全体に対して不満を持つ人たちが、次々に現れている。彼らの受け皿となった極右ポピュリズム・右派ポピュリズムは非常に元気ですが、熟議デモクラシーはいま非常に難しい状況におかれている。

この点では、闘技デモクラシーのほうが先手を打ったといえるかもしれません。かつて「闘技デモクラシー」を唱えたムフたち、最近は「左派ポピュリズム」ということを主張するようになっていきます。つまり、左派もポピュリズム戦略によって人びとの感情や情動に訴えかけないといけないというわけです。

たとえば、フランスの「黄色いベスト運動」は、人びとが政治的に何を要求しているかは明確ですが、そこにはおさまらない過剰なものがある。この過剰さをどのよう

に政治的に意味づけしていくのかという、ヘゲモニー闘争が激しくなっています。右派の国民連合のルペンや左派のメランションといった人たちが運動に関わって、なんとか自分たちの方向で、その運動を位置づけようと闘争しています。こうした状況で、「現代の民主主義は、熟議してきた中道路線の人たちが無視してきた層へ呼びかけなければいけない。そして、左派も彼らの不満を聴き届け、自分たちに引きつけていくための戦略が必要だろう」というのが左派ポピュリズムの基本的な発想です。

つい最近、ムフの『左派ポピュリズムのために』（明石書店）という本を翻訳しましたが、この本のなかで彼女は繰り返し「左派ポピュリズムこそが民主主義を深化させるのに不可欠である」と言っています。それは、いまや誰もが自分たちの聴きたいことしか聴こうせず、見たいものしか見ようとしなくなり、民主主義の土台となる多様な人々が語る空間が失われてしまった。そうした状況において、相変わらず語ることを呼びかけているだけでは不十分ではない

か。語る空間を再構築するために、彼女の言い方では自由民主主義を回復するためにこそ、左派ポピュリズムは求められるのだ、と。この『左派ポピュリズムのために』は、訳者ですから、強く宣伝しておきたいと思います（笑）。

【加賀美】 ポピュリズムというと、日本では、あまりよいイメージを持たれていないように思います。ポピュリズムが民主主義にとって重要だ、というお話は意外な印象を持ちました。

【山本】 ポピュリズムは、日本では「大衆迎合主義」と訳されることが多いので、あまりよいイメージはないかもしれませんが、アメリカや南米では、歴史的にも民主主義ときっても切れない。たとえば、19世紀にアメリカのポピュリズム政党である人民党が、共和党と民主党の二大政党制からこぼれ落ちた農民層の声を拾い上げ、一時的とはいえ、存在感を示しました。南米では、アルゼンチンのペロンやベネズエラのチャベスなどが典型的ですが、政治腐敗やエリート主義に対して、貧しい人々が強く異議申し立てをするためのチャンネルとしてポピュリズムを使いました。

水島治郎先生の著作『ポピュリズムとは何か』（中公新書）の表現を使うと、こうしたポピュリズムは解放的な側面を持っていたわけです。その点において、ポピュリズムは民主主義と非常に近い、切っても切れない関係にあることを、まずは押さえておきたいと思います。

そのうえで、いまヨーロッパで起こっている、一般的には「右派ポピュリズム」と呼ばれるものは、解放的な側面というよりは、どちらかといえば排外主義的で、移民などマイノリティの人たちを排除すること



「左派ポピュリズムのために」
シャンタル・ムフ著 山本圭・塩田潤訳

で国民の一体性やアイデンティティを取り戻す、そういう姿勢で求心力を高めています。

こうした解放的なポピュリズムと排外主義的なポピュリズムに共通点があるとすれば、既成政党（ヨーロッパにおいてはEU）のエリート政治に不満をもつ人たちがそこに集まっているという点です。ポピュリズムは、そうした人たちにとっての重要な政治参加とも言えるのです。

【加賀美】 確かに今日のポピュリズムは、排外主義的な側面が強まっています。私たちはポピュリズムにどのように向き合うべきなのでしょう。

【山本】 適切な言い回しではないかもしれませんが、まずはポピュリズムを支持している人たちを不合理とみなして、「困った人たちだ…」としないことです。ポピュリズム政党やポピュリズム政治家を支持するには、必ず理由や原因がある。それを分析し、理解しなければいけません。

ところが、そうしない人がとても多いのです。たとえば、日本でも新聞などが典型ですが、「ポピュリズムの跋扈によって、欧州情勢は今後さらに不透明だ」といった論調で、基本的に「やれやれ…」といった姿勢を取っています。ところが、そういった「やれやれ…」という態度こそが、今日のポピュリズムの背景にほかならない。だからこそ、まずは彼らの主張をまじめに受けとめることが欠かせません。

同時に、なぜ彼らが声を上げているのかを理解しようとすることも重要です。たとえば、緊縮政策とは何だったのか。人びとのお金が失われていくし、お金が回らなくなるし、さまざまな行政サービスが民営化されていく状況で、どんな苦しみがあった

のか。それを、私たちも政治家も理解しなければいけない。

さらに、ポピュリズムは、一見不可能に思われること、つまりよくも悪くも「常識」に挑戦することを主張し、その可能性を広げる点も見ないといけません。トランプ大統領が「国境に壁をつくる」と言ったとき、誰もがほとんど冗談と思ったわけです。けれども、本当に作りかねないところまで来ている。私たちの「こんなことは無理だ。起こるはずがない」という常識を揺るがすようなことを、ポピュリズムはときに主張し、ときに実現してしまう。

それは、非常に破滅的な帰結を迎えることもあります。他方で解放的な側面もあります。たとえば、アレクサンドリア・オカシオ＝コルテスという、先のアメリカの中間選挙で、民主党から出馬して最年少の下院議員に当選した人がいます。彼女は富裕層への増税を強く訴えています。こういうと、日本だとすぐに「富裕層が海外に出て行ってしまうじゃないか」と反対論が出てきますが、それでも私たちが考えたこともなかった、あるいは最初から無理だろうと除外した選択肢を、ポピュリストは示すことがある。私は、これこそが、よくも悪くもポピュリズムの重要な役割だと思っています。

【加賀美】 なぜ、人びとがポピュリズムを支持するのかについて、理解しようとする姿勢がないと、結局、彼らの問題が解決にいたらないから、とも言えそうですね。

【山本】 そう思います。そして、彼らの支持の理由のひとつは、なにより生活面にあります。この点は、生協の取り組みなどとも密接に関わってくる話だと思います。

人びとがどんな暮らしをしていて、暮ら

しのなかでどんな不満を持っているのか。外国の人たちを含んだ多文化のなかで、どのようなトラブルを抱えているのか。そういった声を拾い上げることなく、「彼らはウソにだまされているんだ」とか「ポスト・トゥルース (真実) だ」とか「反知性主義だ」と決めつけてしまい、現実を直視してこなかった側面が、リベラル知識人といわれる人たちやエリート政治家たちにはあったのではないのか。

「私たち」の代表の役割

【加賀美】 多様化した社会で声を聞く、という点では、どのように代表を選ぶのかも大変な課題だと思います。生協も巨大化するなかで、組合員が多様化し、平均的な組合員像を描くのが難しくなっています。

私たちの代表をどう選ぶのか、少数の人たちをどう包摂するのか、運営への参加をどう促すのか等について、現在の民主主義論から示唆があればお聞かせください。

【山本】 直接の答えになるかどうかはわかりませんが、いわゆる代表 (リプレゼンテーション) というのは政治学においても非常に重要な概念です。参加デモクラシーは、代議制に対し不信感が強かった時代ということもあり、「人びとが直接参加するんだ」という感じが強かった。代表には、それこそ 18 世紀のルソーの時代から懐疑的なまなざしが向けられてきました。

それでも、最近は民主主義論や政治理論において、「代表制の転回」が言われるようになっていきます。これは、簡単に言ってしまうと、「代表が果たすさまざまな役割をあらためて検討しないといけない。『代表制はダメで、人びとが直接的に参加す

れば解決する』という単純な話ではない」という議論です。

私が研究しているエルネスト・ラクラウも、これにかかわって面白いことを言っています。たとえば、A というグループを B さんという人が代表する場合、代表が命令・委任の機能だとしたら、B さんは A というグループで決まったことを単に伝えることが役割となります。でも、代表の機能は、そうした下から上への一方通行の矢印だけではありません。むしろ、誰かに代表されることで初めて、代表される側の利益や意見やアイデンティティなどが、事後的に定まる側面があるのです。つまり、代表には非常に構成的な役割がある。代表する者と代表される者との間に非常にダイナミックな関係がある。

ですから、代表する側が、単に意見を受けとめるだけでなく、あるいはそれをどこかに伝えるだけでなく、代表される側に積極的に働きかけていくことには大きな意味があると言えます。代表する側が「これはどうですか」と提示することによって、そちらのほうに人びとが引きつけられて、「ああ、これが欲しかったんだ」とか「これにしよう」というかたちで、自分たちの選好が形成される。このような代表の複雑な機能が、このかん検討されてきました。

ポピュリズムは、とくにそういうところがあって、人びとは最初から明確なかたちで「反移民」「反 EU」だったわけではないと思います。暮らしのうまくいかなさであったり、しんどさとか、少なくとも政治的には象徴化されないようなネガティブな思いのようなものが、ある政党や政治家によって代弁されたときに、「ああ、これだったんだ」というふうに自分の不満を意味づけるのだと思います。

こうした代表の遡求的な関係は、政治理

論的・民主主義的には非常におもしろいと思っています。参加デモクラシーは、代表制とはずっと仲が悪かったんです。なぜなら、参加デモクラシーは、自分たちのことを「直接」民主主義だと思い込む側面が強かったからです。しかし、最近の研究では、参加と代表は必ずしも相反するものではない、という話になっています。参加の反対・対立物は、代表ではなく、むしろ代表関係からの排除・無視・疎外であって、代表そのものは参加と十分両立するということです。

同時に、参加デモクラシーも熟議デモクラシーも、基本的には「市民社会へ自発的に参加し、お金も出し、政治の集まりで自分たちの意見を言い、運営に関わっていく」という非常に強固な市民像を想定していたと思います。

しかし、代表の考え方は、デモクラシー論における市民像とは、不安定で、頼りなく、後から自分たちの思いを偶然的な仕方では決めていくようなアイデンティティを持つ者でもある、という見方を拓いてくれるのです。そのほうが私たちの生活実感として合っているのではないのでしょうか。

ですから、これまで民主主義論では公共性、市民社会、シチズンシップ、参加などが言われてきたけれど、私個人の民主主義論としては、そういう面をもう少し弱めて、偶然的であったり、頼りなさであったり、場合によってはイヤイヤ何かするような、そんな市民を念頭に置いた民主主義の制度化や仕組みが、より実態に合っているし、大事ではないだろうかと思っています。

【加賀美】 生協では組合員を代表する立ち位置として、総代や組合員理事がありますが、組合員の生活ニーズを伝えることだけが役割だというふうに捉えがちなのが

あります。あるいは、何を言っているのだろうという悩みもありますが、今の代表の役割を何うと「自分はこう思う」といった発信には大切な意味があるということになりますね。

【山本】 私は生協については詳しくありませんが、たとえば理事会や総代、あるいは研究所などが「生協の役割はこうなんだ」という代表のあり方を全うすることによって、そんなことを考えたこともなかった組合員が「そういう役割もあるのか」というように引き寄せられたり、あるいは一消費者にすぎないと思っていた自分の立場が少しだけ公共的に広がることもあるかもしれません。

代表というものは、そういうふうにして、代表される人たちのアイデンティティを再形成することにもなると思います。だからこそ、そうした発信は、もちろん押し付けにはならない程度に、積極的な意味があると思います。

社会にとっての生協と民主主義

【加賀美】 民主主義についてお伺いしてきましたが、そもそも組織運営の基盤に1人1票制を採っている生協は、現状では社会のなかで、とりわけ経済事業としては珍しい存在です。

お話の最後に、そうした存在はどのような社会的な役割や期待が持てるのかお伺いできますか。

【山本】 社会的な役割に関してですが、子育て支援など、生協組合員同士のネットワークは現代社会においては非常に希有ですね。個人的には、生協があまりにも脱政

治化・非政治化しているのは残念ですが、生協の支え合いのあり方は社会における成功例であり、非常に重要なケーススタディですので、これからも市民同士の支え合いの場をどんどん広げてほしいです。市場にも行政にも媒介されない、市民社会における独自の役割は大きいと思いますし、注目しています。

消費者としての位置、私人的な立場を社会に反映していくことも大事だとは思いますが、同時に、生協が担ってほしいと個人的に思うのは、公共的な役割や社会的な連帯との架け橋となるような役割です。とくに社会全体がばらばらになり、かつてのようなつながりが解体したなかで、生協のようなゆるくも重要なネットワークは非常に稀有な存在です。分厚い市民社会・民主主義を形成していくうえで不可欠な要素であり、今日のポピュリズム政治は、そういったものの不在が招いていると思います。暮らしを守る政治、責任ある政治を重視するのであれば、先ほど言ったような面で生協が果たす役割はきわめて大きいのではないかと思います。

また、生協の運営への参加を通じて、人びとが市民としての責任と自覚を成熟させていくのも非常に重要な過程だと思います。

もっとも、今はみんながみんな、忙しすぎるんですよ。『アーレントのマルクス』(人文書院)という本を出した百木漠さんは繰り返し、「人びとは、労働に飲み込まれすぎていて、政治を考えたり、社会のことを考える時間がほとんどない。時間を取り戻さないといけない」と言っています。これは生協における参加デモクラシーだけの問題ではありません。社会全体が縮こまってしまって、なけなしの余暇はインターネットや SNS に奪われている。そんななかで、

参加を拡大して、市民社会をきちんとつくるには、労働時間を減らし、余暇の時間がないといけない。素朴な労働運動が、じつは現代社会でも不可避だなど、思うようになりました。そうして生まれた時間で、家庭や地域、あるいは地域や社会全体にいつそう多くの人々がつながることができれば、よりよい民主主義が実現できると思います。

【加賀美】 民主主義という大きくて難しいと考えがちな話題について、非常に整理されたお話を伺い、生協という組織の意義や可能性を、広い視点で考えることが出来そうです。本日はありがとうございました。